

プロ野球中継におけるラジオとテレビの実況・解説者の比較
A comparison of play-by-play and color commentary in radio and television
broadcasts of professional baseball

1K08A100-1 齋藤健

主査 リー・トンプソン 副査 倉石 平

【序論】

プロ野球中継は一つの節目を迎えている。日本のプロ野球中継は、日本放送協会名古屋中央放送局（現：NHK名古屋放送局）による日本東京巨人軍対名古屋金鯱軍のラジオ中継から始まったが、人が2年連続Bクラス入りをした2006年ごろから視聴率が急激に落ち込み、プロ野球の視聴率というものは現在右肩下がりできている。それを示しているように、巨人戦ナイターのテレビ平均視聴率も最盛期である1983年の27.1パーセントから、2006年度には9.6パーセントまで落ち込んでいるのである。そういったなかで、プロ野球界全体としても変革の動きが近年出てきた。そして、プロ野球中継というのも転換期を迎えなければならない。人気の低迷ともに、視聴率も低下の一方だが、中継自体の数もめっきり減ってきているのだ。

筆者は、幼少期からプロ野球中継に興味関心があり、3年時からゼミの課題においてプロ野球中継を取り上げてきたので、今回の卒業研究でも取り上げたのである。

先行研究としては、「現代メディアスポーツ論 世界思想社」（橋本純一、岡田光弘ら、2002）・「こんなスポーツ中継は、いらない！ 青弓社」（水谷憲司、小椋博ら、2000）・「プロ野球中継における実況の談話分析 日本大学国文学会」（伊藤彩花、2010）らを取り上げ研究の参考とした。

【研究目的】

テレビ・ラジオの野球中継に関する研究を行う。その中で、テレビ・ラジオそれぞれの実況、解説者の発話量に関することを比較することで、それぞれのメディアにおける実況の役割と、それぞれのメディアの解説者の特徴について明らかにし、第1章・第3節の中で取り上げられていた「乖離現象」が本当にメディアの中であるのかということを明らかにすることを目的とした。

現在のテレビ・ラジオのプロ野球中継は、テレビに関しては地上波が衰退しCSデジタルが躍進しているが、ラジオは相変わらずプロ野球中継が強いコンテン

ツとして活躍し聴取率もたかいのである。

仮説は、以下の3つである。仮説1；実況の発話量はラジオ中継の方が多くなると考えられる。仮説2；テレビの解説者の方がラジオの解説者に比べ、発話量が多いのではないだろうかと考えられる。仮説3；乖離現象が、テレビには映像があり情報量が多いために、ラジオに比べテレビ解説に多くみられるのではないかと考えられる。

【研究方法】

日本野球機構主催の試合を分析対象としてあげ、計5試合分の各2回表裏（合計10回分）をランダムに選択し分析対象として選定した。そして、それらの試合の実況・解説の言動を文字化し、コーディングシートに記載していった。そのなかで、実況・解説のそれぞれの1分間平均の発話量を出し、その数値でテレビとラジオを比較分析する。仮説3に関しては、「乖離現象」の定義に該当している場合にカウントし、その数をテレビとラジオで比較する。

【結果と考察】

仮説1・仮説2は考えていたような結果になった。ラジオの実況に関しては発話量がテレビに比べ非常に多く、解説に関しては逆の結果が出た。そこには、同じ役割を持っていながら、メディアの特性の違いにより発話量・発話回数に違いが出たのである。仮説3に関しては、全く考えていたような結果は出ず、メディアによる違いによって解説者の乖離現象が出てくることは認められなかった。

【結論】

テレビのプロ野球中継は「会話」であるという一方で、ラジオのプロ野球中継は、実況者の「独演会」の要素が非常に大きいと考えられる。映像の有無でそれらの中継の特色というのは大きく変わってくるのである。また、今後の課題としては、極端な乖離現象というようなものは見えないのであるから、解説者が中継の中でどのように視聴者・聴取者を楽しませていくのかというのが非常に重要な問題である。